



 巻 頭 言

Global Bargain への課題

三 浦 武 雄*

第 17 回の情報処理学会全国大会での東京大学猪瀬先生の特別講演の中で、今後の Global Bargain の時代に備えて資源を持たないわが国においては、技術開発、生産技術こそが Bargain Power になり得るという話があった。また最近になって米国、ソ連の 200 海里を専管水域とする宣言があり、海洋資源に恵まれていたわが国はその多くを失った感がある。残されたものは人的資源のみであり、ますますその感を強くした。

資源を必要としない技術開発の最右翼に本学会に関係深いシステム技術、ソフトウェア技術が挙げられる。そこで現在果してわが国は十分に Bargain に値するポテンシャルをもっているであろうかを考えてみたい。

第 2 次世界大戦勃発直前の米国と日本の航空機の生産を例としてみると当時わが国には、零戦のような世界に比類なき戦闘機と、これを操縦する世界のトップレベルにあるパイロットの技倆、執念があった。しかし一方当初の生産台数が月産 80 機足らずであったといわれ、その上パイロット育成には好都合な自動車運転経験をもつ人もほとんどいかなかった。これに対して、米国では自動車産業は当時既に隆々としていたし、ドライバーの数も多く、いわゆるインフラストラクチャーに大きなギャップがあったのである。

現在情報処理分野では、ハードウェアについては世界と対等以上の技術をもつものが多くなったが、ソフトウェア技術については前述の比較が当てはまるのではないだろうか。学会や論文面での専門家レベルでは、少なくとも今日全く互角であるといってもよいであろう。しかし、わが国と米国の間には、この基盤的な厚さに大きなひらきがあるように思う。彼等にはアポロを始め多くの大規模、複雑なシステムの開発経験があり、コンピュータについても、学校や家庭で実践的に多くの時間をさき、ソフトウェアの入出力の基本手段であるタイプライタは、日常茶飯事の道具であるし、

これに使う言語は自国語である。

一方業務の合理化多様化に対応して、コンピュータの利用に対するニーズはますます高まるばかりであり、現下の低成長下でも、高度成長形の市場の展開をしている。しかし、同時にシステムエンジニアとソフトウェアマン等広義のソフトウェア人口の不足がある。現在でも数多くの人が開発に従事しているが、この仕事に従事し得る人材は乏しく、かつ教育するとしても年令的、能力的制限がある。更にソフト人工の強化に対して阻害要因になるのは、これらに対する金銭的価値評価が低く、サービスという事で必ずしも要した費用の回収ができない。

以上は情報システム、特にソフトウェアシステム開発上の現在の隘路であるが、これらを克服しない限り世界の Bargain には勝てないのであり、何等かの工夫、努力、開発、提言が必要であろう。それを少しでも改善するために、我々自身でできることは何であろうか。先ず心がまえとして、

- (1) 本来 visual でないが内容を visual 化して、一種のハードウェアと同じように定量的に他人に理解させる努力。
- (2) 本来職人的開発を必要とするものであろうが、他人にもその技術が利用できるような波及性のある技術として確立してゆく努力。
- (3) 他人の開発した技術を積極的に利用する努力。
- (4) 第 3 者が優劣を決定できるような代替案を提案する努力。

など生産性向上評価の面で役立つ努力が必要であろう。その他ソフトウェア相互利用上の問題、特許的な問題、価格・契約の問題、更には教育の問題など幅広い制度・慣習上の強力な支援なくしては達成できないが、今後の Bargaining Potential up への努力は先ず情報処理学会の会員の我々から、大いに心がけていく必要がある。(昭和 52 年 1 月 7 日)

* 本会常務理事 (株)日立製作所 システム開発研究所 所長